

グラフィック・シラバスの提示による科目の体系的な理解促進

酒井 浩二^{*1}, 阿部 一晴^{*1}

^{*1} 京都光華女子大学キャリア形成学部

Promote understanding of the systematic nature of courses by presenting graphic syllabus

Koji Sakai^{*1}, Issei Abe^{*1}

^{*1} Faculty of Career Development, Kyoto Koka Women's University

In both face-to-face and on-demand courses, graphic syllabuses were presented and explained at the beginning of each lesson, and the lesson management methods and practical effects were compared. In both courses, the reference rate and comprehension rating of the text syllabus before course registration was high. The rating result indicated that the reference to the graphic syllabus was effective in understanding the entire 15 times lessons, understanding the next lesson, understanding the final goal of the course, and motivating learning. There was no big difference in the response results of the students between the face-to-face class and the on-demand class. The graphic syllabus was presented both at the beginning and end of each lesson, and it was discussed effective to describe the achievement goals of the courses. We proposed pasting a graphic syllabus link to each course in the text syllabus and curriculum map on the web.

キーワード: グラフィック・シラバス, テキスト・シラバス, 科目の体系的な, 科目の到達目標

1. はじめに

本稿では、対面授業とオンデマンド授業の2科目で、各授業回の冒頭にグラフィック・シラバスを提示して講義し、その授業運営法や実践効果を検証する。

シラバスは通常、文字のみで学生に開示される。グラフィック・シラバスは、通常のテキスト・シラバスをダイアグラムで示し、科目全体の体系的な各授業回の位置づけが分かるように図示化したものである。表1は、通常のテキスト・シラバスとグラフィック・シラバスの比較である。テキスト・シラバスは、学生が受講の有無の手がかりとして受講登録前に参照可能である。授業概要、授業計画、授業方法、成績評価など多項目に関して文字のみで記載され、文字数も多い。授業計画で文字のみで記載されている15回分授業の内容や授業全体の体系的な、すでに頭の中でイメージしている担当教員にとっては理解できるが、これから履修して学ぼうとする初学の多くの学生にとって科目

の全貌を把握しにくい。一方、グラフィック・シラバスは、学生は受講前には参照できず、受講開始後に参照する。テキスト・シラバスに記載の授業計画について、15回分の授業全体の内容をダイアグラム、絵図なども入れて表現される。文字数は少なく、15回分授業全体の体系を理解しやすい。

グラフィック・シラバスによりシラバスの体系を理解しやすくすることは、カリキュラムマップによりカリキュラムの体系が理解しやすくなることと同様である。カリキュラムマップは、カリキュラム表の体系をダイアグラムで示したものである。表2は、学修目標に到達するための学修体系とその可視化方法を、3つの階層で示したものである。ディプロマポリシーを保障するためにカリキュラムが設置されるが、カリキュラム表で見てもその体系や各科目群の位置づけを把握しにくい。カリキュラムマップで示すと、把握しやすくなる。そして、各科目で到達目標が設定されている。

表 1 シラバスとグラフィック・シラバスの比較

	テキスト・シラバス	グラフィック・シラバス
学生の参照	履修登録前	履修登録後
記載内容	授業概要や成績評価など多項目	授業計画が中心
表現媒体	文字のみ	文字中心で描画や絵図も含む
文字数	多い	少ない
科目の体系の把握	学生は把握しにくい	学生も把握しやすい

その目標を達成するために通常 15 回分授業が計画されるが、15 回分の授業計画を見ても、その体系や各授業回の位置づけが把握しにくい。一方、グラフィック・シラバスで示すと把握しやすくなる。さらに、各授業回で授業目標が設定され、その目標を達成するために 90 分間の授業が計画される。この授業計画スケジュールは通常、学生には提示されず、円滑な授業運営、進行のために授業担当教員のみが参照、把握しておく。

グラフィック・シラバスの作成過程として、看護学分野での科目「母性看護学概論」の実践研究⁽¹⁾で作成された。その作成方法は、KJ 法に基づいて、キーワードの書き出し、配置、見出しづけ、自己点検の 4 段階の個人ワークのあと、ペア・ワークによるブラッシュアップを複数回重ね、グループ・プレゼンテーション、全体プレゼンテーションで行われた。第 1 段階で、キーワードの抽出時に科目の到達目標の再検討が行われた。第 2 段階でキーワードの配置の並べ替え、第 3 段階で同様のキーワードを群化して見出しを付け、第 4 段階で学修の興味と役立ちの観点で点検された。学生にグラフィック・シラバスを提示することで各授業回の関係性を理解しやすくなるのと同様、カリキュラムマップを提示することで、担当科目のカリキュラム全体における位置づけを理解しやすくなると考察された。

グラフィック・シラバスの作成は、FD の教育改善の位置づけにもなる。先行研究⁽²⁾では、プレ FD の位置づけで、将来大学教員を目指す大学院生がシラバス作成に関する授業を受講する前後で 1 年生対象科目のシラバスを作成し、前後のシラバスを比較した。その結

表 2 学修目標到達に向けた学修の体系と可視化方法

学修目標	学修体系	学修体系の可視化方法
ディプロマポリシーの達成	カリキュラム	カリキュラム表→カリキュラムマップ
各科目の到達目標	コース(各科目)	テキスト・シラバス→グラフィック・シラバス
各回授業の到達目標	クラス(各授業回)	授業スケジュール

果、シラバス全体の文字数は受講前より受講後で増加し、特に「目標」「成績評価」「メッセージ」の項目において増加が顕著であった。FD 研修など、シラバス作成の留意点を学ぶことで、より学生に理解しやすいシラバスになる。シラバスやカリキュラムの可視化で最もメリットがあるのは教員あるいは教員集団であり、グラフィック・シラバスの作成過程が重要であるとの指摘もある⁽³⁾。また、学生 FD の一環で、受講済みの学生がグラフィック・シラバスを作成する取組⁽⁴⁾もある。受講済み科目について学生がグラフィック・シラバスを作成し、FD ワークショップで教員と学生がグラフィック・シラバスに関して、教育者、学習者として異なる視線で議論された。受講後の学生であればグラフィック・シラバスの作成は可能であり、教授内容をよく把握する授業実施者もまた短時間でグラフィック・シラバスを構成できることが確認された。

グラフィック・シラバスの授業実践の報告⁽⁵⁾として、第 1 回の授業の全体構成・ガイダンスの中で提示し解説するとともに、毎回の講義で、どの内容の講義であるかの確認をするように説明した。その結果、講義内容の構造化により、これまで「暗黙」で伝えていた講義の意味や内容が、より「形式化」して伝えることができる。授業担当教員により内省された。

本研究では、対面科目とオンデマンド科目の 2 科目で、毎授業回の冒頭でグラフィック・シラバスを提示して、科目全体の体系や各授業回のテーマについて説明した。第 14 回、15 回の授業で、受講生からグラフィック・シラバスの有効性などの回答データを収集・分析して、両科目での効果の違いを検証する。

2. 方法

2.1 授業科目

表3は、本研究でグラフィック・シラバスを使った2科目A, Bの概要である。2科目とも専門課程の選択科目で、15回の授業で構成された。

表3 本研究でグラフィック・シラバスを使った科目

	科目A	科目B
科目名	社会調査法	企業の社会的責任
担当教員	第一著者	第二著者
授業形式	対面授業	オンデマンド授業
受講生	41人	70人
回答者数	29人	34人
回答率(%)	70.7%	48.6%

2.2 授業期間

2科目は2022年前期(4月～7月)に開講された。

2.3 開講場所

2科目は本学で開講された。「社会調査法」は、対面授業であったが、第14回、15回授業のみオンデマンドで開講した。「企業の社会的責任」は、全15回の授業をすべてオンデマンドで開講した。

2.4 シラバス

本研究のテキスト・シラバスは、以下の項目で構成され、本学のLMSで教職員、学生が随時アクセスして参照可能であった。科目名、担当教員、授業テーマ、授業概要、到達目標3つ、授業計画、授業方法、授業外学習時間、成績評価、授業担当者メッセージ、オフィスアワー、教科書・参考書。

図1は本科目の2科目A, Bで使ったグラフィック・シラバスである。各科目のグラフィック・シラバスは、以下の観点で、授業担当教員である第一著者、第二著者が個別に作成した。

2.4.1 科目A

テキスト・シラバスに記載されている、各授業回のテーマを中心に、全15回の体系が理解できるようにダイアグラムで作成した。本授業は社会調査士の資格取得に必要な科目の一つであるため、資格取得に必要な科目群もグラフィック・シラバスに含めた。授業の

到達目標はグラフィック・シラバスに記載しなかった。

2.4.2 科目B

授業開始までに全体を網羅した新規のグラフィック・シラバス作成が間に合わず、今期は暫定的なものを使用した。授業内容展開のベースとして参考にした市販書籍(現在は絶版で入手不可)の目次に加筆したものを使用した。主に15回の授業内容の全体像と各回授業でそのうちどこを取り上げるかを示すことに特化し、その他の情報は記載しなかった。

2.5 提示方法

2科目A, Bで、以下の方法でグラフィック・シラバスを受講生に提示のうえ説明した。

2.5.1 科目A

第1回のガイダンスでテキスト・シラバス、グラフィック・シラバスを説明した。第2回授業以降は各授業回の冒頭でグラフィック・シラバスを説明した。各授業回で、授業内容に関する小レポートテーマを3～5個ほど設定し、授業中に作成して授業最後に受講生は提出した。次回授業の冒頭で受講生の小レポートの一部を紹介し、その紹介後にグラフィック・シラバスで前回授業のテーマを説明し、当日の授業回のテーマを説明した。必要に応じて、前回および当日の授業回以外の授業回のテーマを説明した。授業回により異なるが、説明時間は2～3分程であった。

2.5.2 科目B

この科目は教室での対面授業ではなく、フルeラーニング(指定期間中にオンデマンドビデオを視聴して受講する)で提供した。第1回のガイダンスでテキスト・シラバス、グラフィック・シラバスを説明した。第2回授業以降は授業冒頭と最後にグラフィック・シラバスを示した。基本的に毎回の授業では、冒頭に前回授業内容の振り返り、受講生からの質問・コメントへの回答をした後、当該授業の内容に入る直前にグラフィック・シラバスで今回授業の全体での位置づけを明示し、受講生に取り上げる内容と目的等を具体的にイメージさせてから授業を進めることを意識した。

2.6 回答方法

第14・15回目に受講生はLMSから無記名で回答した。期間は2022年7月14日～8月7日であった。

(a)科目 A

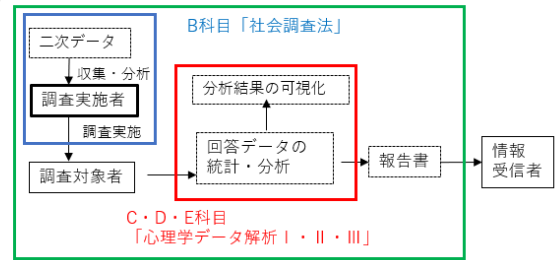
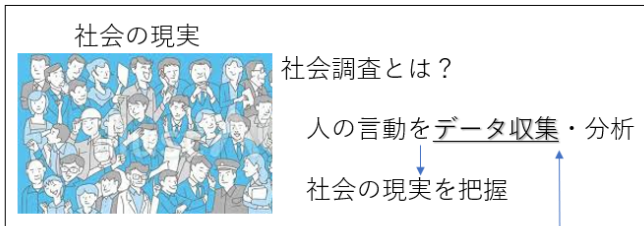
「社会調査法」のグラフィックシラバス

⑭全体のまとめ、定期試験の説明

①社会調査の概要

①社会調査に必要な技能

A科目（社会調査の基本的事項）「社会と統計」

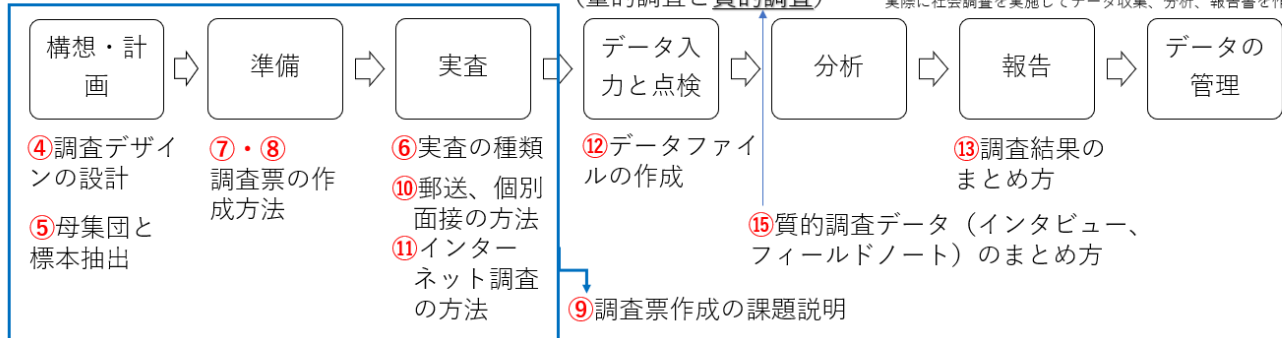


③量的調査の場合の社会調査プロセス

②多様な調査方法 (量的調査と質的調査)

G科目「社会調査実習Ⅰ・Ⅱ」

実際に社会調査を実施してデータ収集、分析、報告書を作成



(b)科目 B

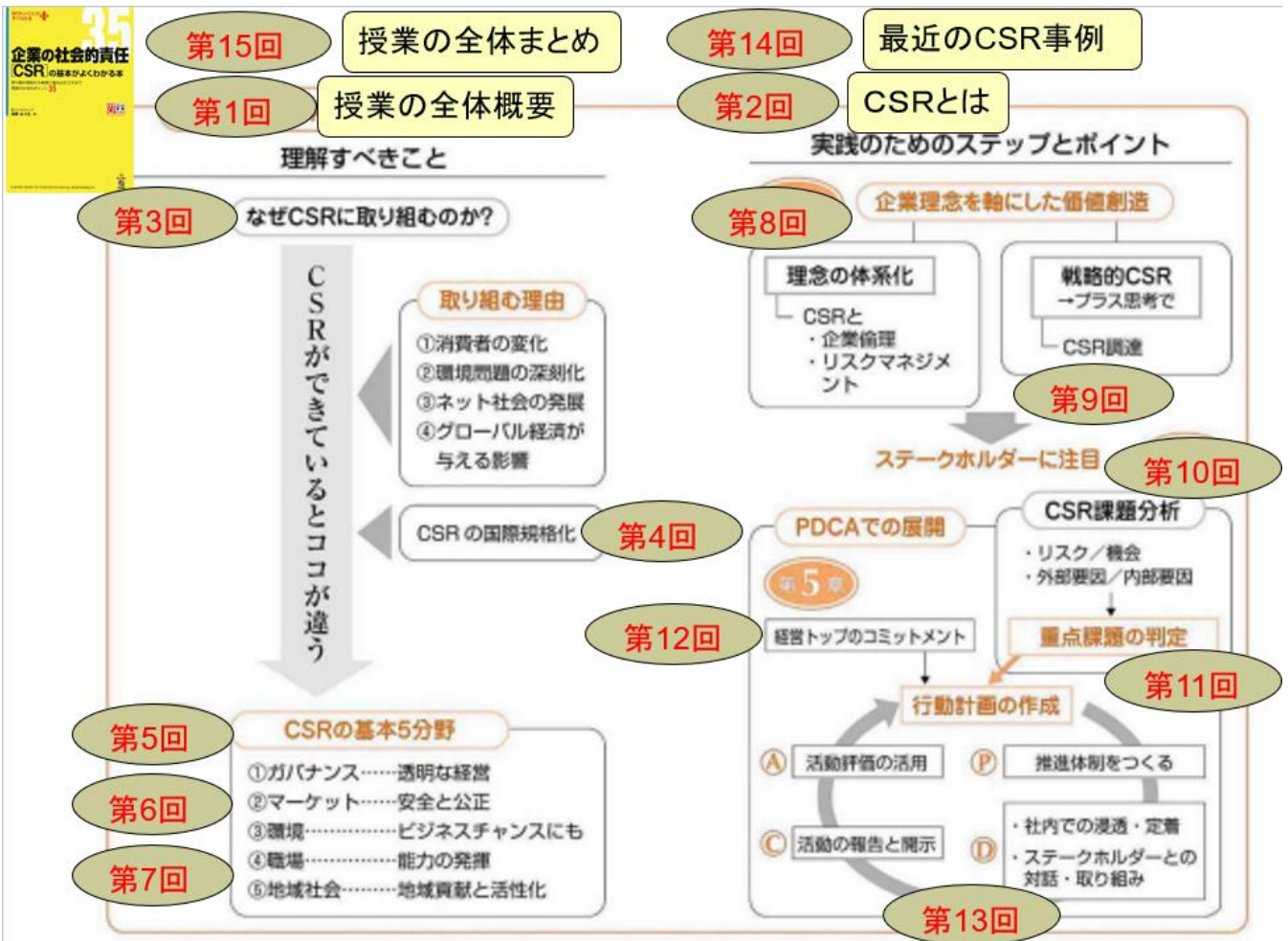


図 1 本研究の科目 A (上図) と科目 B (下図) のグラフィック・シラバス

3. 結果

表4は、グラフィック・シラバスを使った両科目での、受講生の回答の結果である。科目AとBの2科目間で、表4の回答の傾向に大きな差はなかった。ただし、本研究は対面授業、オンデマンド授業でそれぞれ1科目のみでの授業実践であるため、この結果から対面授業とオンデマンド授業の授業形態間にグラフィック・シラバスの導入効果に差がないと結論づけることはできない。検証に向けて、より多くの科目数、授業担当教員に関するデータ収集と分析を要する。本研究では以降、2科目を含めて分析した結果を示す。

表3のように、回答率は両科目で59.7%と低かった。その要因として、両科目とも対面ではなくオンラインで受講生に回答依頼したことが影響した可能性がある。概して、回答する受講生は受講への関心が高いと考えられる。第15回授業の科目の到達目標の達成度評価で、回答した学生群は未回答の学生群より成績が高かった研究もある⁶⁾。表4の回答結果は、全受講生の傾向でなく、学習意欲の高い学生群の傾向を示すかもしれない。回答率の向上に向けた実践の工夫を要する。

表4 本調査の受講生の回答結果

(a)テキスト・シラバスの参照

	科目A	科目B
読んでいる	25	34
読んでいない	4	0

(b)テキスト・シラバスの理解

	科目A	科目B
理解している	26	33
理解していない	3	1

(c)テキスト・シラバスを参照しない理由(複数回答可)

	科目A	科目B
アクセスが面倒	2	
読むのが面倒	1	
分量が多い	2	
文章の読解が難しい	1	
専門用語が多く読解しにくい	1	1
その他	0	

(d)各授業回でのグラフィック・シラバスの認識

	科目A	科目B
認識していた	27	29
認識していなかった	2	5

(e)各授業回でのグラフィック・シラバスの効果

①15回授業全体の理解

	科目A	科目B
非常に効果的	6	10
効果的	20	17
効果的でない	2	3
全く効果的でない	0	0

②次回授業で学習する内容の理解

	科目A	科目B
非常に効果的	6	12
効果的	21	14
効果的でない	1	6
全く効果的でない	0	0

③科目の最終的な目標

	科目A	科目B
非常に効果的	11	12
効果的	16	19
効果的でない	1	1
全く効果的でない	0	0

④学習動機の向上

	科目A	科目B
非常に効果的	9	11
効果的	14	17
効果的でない	5	4
全く効果的でない	0	0

(f)グラフィック・シラバスの提示・説明の適切なタイミング(複数回答可)

	科目A	科目B
授業最初	22	31
授業途中	2	3
授業最後	4	5

3.1 テキスト・シラバスの参照

表 4a より、履修登録前のテキスト・シラバスの参照率は 92.2%であった。両科目とも選択科目であったことから、ほとんどの学生はテキスト・シラバスを参照のうえ受講を判断したと考えられる。また表 4b より、テキスト・シラバスを理解していた受講生の割合は 92.2%であった。つまり、ほとんどの受講生はテキスト・シラバスを参照し、主観的評価に基づくと理解して受講しているとみなせる。

一方、履修登録前にテキスト・シラバスを参照しなかった受講生も数名いた。表 4c より、テキスト・シラバスを参照しなかった理由として、科目 A では、「LMS へのアクセスが面倒」「読むのが面倒」「分量が多い」「文章の読解が難しい」「専門用語が多く読解しにくい」、科目 B で「専門用語が多く読解しにくい」であった。テキスト・シラバスの分量の適切さ、読みやすさ、読解しやすさなど、改善の余地がある。両科目とも第 1 回授業でテキスト・シラバスを説明しており、履修登録前にテキスト・シラバスを参照しなかった受講生は、その説明を受けて理解し、履修登録することを判断したと考えられる。

ただし、テキスト・シラバスは分量が少ないほどよいわけではない。実際、表 4b のように 92.2%の受講生はシラバスを理解している。詳細に記載することで受講予定の学生に過不足なく科目に関する情報を提供でき、学生の受講ニーズと教員の提供する授業内容のミスマッチを防ぐことができる。受講生の関心度、理解度は均一でなく、個人差が避けられない。全受講生がしっかりテキスト・シラバスを参照して理解するわけでないことから、より科目の体系を把握しやすいグラフィック・シラバスを履修登録前にも受講生に参照できる仕組みが一つの解決策として考えられる。

3.2 グラフィック・シラバスの参照

表 4d より、グラフィック・シラバスの認識率は 88.2%であった。2.4 節のとおり、毎回授業の冒頭の数分間で図 1 のグラフィック・シラバスを説明した。グラフィック・シラバスと認識していなかった 11.8%の受講生は、各授業回の資料の一部として受け止めたのかもしれない。グラフィック・シラバスを提示・説明の際、科目全体の体系を示した図であり、毎回の授業

で提示する際に明示的に説明がよいかもしいない。

表 4e の①～③より、「15 回授業全体の理解」「次回授業の理解」「科目の最終的な目標」は高い評定値であった。各授業回で科目の体系を把握したうえで、各授業回のテーマや目標の達成に向けて学修することが、科目の到達目標の達成に向けて重要になる。グラフィック・シラバスでなくテキスト・シラバスであれば、教員は説明に時間を要し学生は理解も難しいが、グラフィック・シラバスの場合は数分で説明でき学生も理解しやすくなる。この結果は、グラフィック・シラバスの導入の有効性を明確に示す。

表 4e の④より、「学修動機の向上」も高かった。グラフィック・シラバスの提示で、各授業回での学修が科目全体の中でどのように位置づけられ、つながり、学習成果につながるかを明示的に示される。この明示的な説明により、過去の授業回に学んだことの意味や重要性の再認識や、現授業回の学びが数回後の授業回の学びにつながる予期などが得られ、動機づけにつながるのかもしれない。

3.3 グラフィック・シラバスの授業運用

表 4f より、提示のタイミングは「授業最初」が高い割合であった。この結果は、本研究の両科目で毎回授業の最初にグラフィック・シラバスを提示したことが大きく影響していると考えられる。授業担当教員にとって、前回授業のふり返りの一部紹介と復習のうえ、本授業回の流れや位置づけを説明するうえで、授業最初がもっとも使いやすかった。ただし、授業回によっては、必要に応じて授業途中や授業最後にもグラフィック・シラバスを提示、説明した。毎回の授業で、次回の授業回の予告として授業最後でのグラフィック・シラバスの提示も有効と考えられる。

科目 A の受講生の自由記述で、解像度の低いグラフィック・シラバスを毎回授業で配布・説明より、きれいに印刷したものを 1 回目授業で配布して、毎回授業に持参のほうが良いとのコメントがあった。このコメントは的確である。グラフィック・シラバスを受講生が毎回授業で持参して、新たな気づきやふり返りなどを書き込みすることで、より科目の体系の理解度が高まると考えられる。毎回授業に持参したグラフィック・シラバスの活用方法は、今後さらに検討を要する。

4. 考察

4.1 各授業回の紐づけ説明のしやすさ

科目における各授業回の位置づけを授業最初に説明するうえで、グラフィック・シラバスは大変有益であった。該当の授業回だけでなく、それ以前に講義した授業回の重要点のふり返し説明や、今後行う授業回の予告など、各授業回をつないで説明しやすかった。テキスト・シラバスを使うと、文字情報量が多いため説明時間が長くなる。一方、口頭のみでの説明だと視覚情報がないため受講生が理解しにくい。各授業回の冒頭説明で、スライド1枚にまとめられたグラフィック・シラバスがちょうどよい分量であった。科目の体系は、受講生は第1回授業のテキスト・シラバスおよびグラフィック・シラバスの説明を聞いただけでは深く理解できず、また忘れてしまうであろう。表4eの結果のように、毎回授業でグラフィック・シラバスを繰り返して提示、説明することで、受講生は科目の体系の理解を少しずつ深められると考えられる。

グラフィック・シラバスの提示、説明により、受講生だけでなく、教員自身が各授業回の講義内容を振り返ることができた。特定の授業回で、説明不足な点や説明が望ましい新たな知見が出てきた場合、グラフィック・シラバスを提示しながら過去の授業回に焦点を当てて補足説明できた。たとえば、科目Aで、2022年7月10日の参議院選挙に関する世論調査の結果が出た際は、グラフィック・シラバスを提示しつつ、世論調査の授業回（第2回授業）や標本抽出の授業回（第5回授業）のふり返しとして補足説明した。この補足説明は、グラフィック・シラバスを未提示の場合、第2回、第5回の授業回の授業内容と関連づけて理解しづらいつらいつらと考えられる。必要に応じて、グラフィック・シラバスに加えて、過去の授業回の授業資料を受講生に開示させて、あるいは教員が提示して補足説明すると、復習の効果がいつそう高くなると考えられる。

科目Aで、毎回の各授業回の冒頭だけでなく、授業途中や授業最後に再提示のうえ説明する授業回もあった。たとえば、調査票データのファイル作成(第12回)の講義中に、このファイルを使って図1a内の「分析」「報告書作成」につながることを、グラフィック・シラバスを提示して説明した。また、特定の授業回の講

義が少し早めに終わった際、グラフィック・シラバスを使って当日や過去の授業回のふり返しを行い、次回以降の授業の流れを説明した。表4fのように、授業最後にグラフィック・シラバスの提示も適切と回答した受講生も若干いた。毎回授業で授業最後の締めくくりにしてグラフィック・シラバスを提示することは、当日の授業回のふり返しや次回以降の授業の予告ができて、教育効果が高いと考えられる。

4.2 グラフィック・シラバス運用の提起

グラフィック・シラバスは、実践活用の有効性が高い一方で実践研究報告が少なく、今後の改善に向けた開発が望ましい。本節では、グラフィック・シラバスの運用に関する提起として、記載内容の点では到達目標の記載、教職員や学生に広く周知する点ではテキスト・シラバスへのリンク、カリキュラムマップ内の各科目へのリンクの2点の、計3点について述べる。

4.2.1 到達目標の記載

表4eの③の結果では、グラフィック・シラバスの提示により、科目の最終的な目標の理解は高まった。しかし、本研究のグラフィック・シラバスで示した内容は、図1のとおり、15回分授業の学び内容の目標であり、学びによる科目の到達目標は未記載であった。本学では、全科目において科目の到達目標が3つずつ設定されている。受講生による到達目標の達成度評価は成績と関連性がない結果であった⁶⁾が、受講生が各授業回のテーマを学ぶ目的や意図を理解するために、科目の到達目標を常に認識することは重要である。グラフィック・シラバスに到達目標を明記し、3つのうち特にどの到達目標に関連する授業回であるか毎回提示、説明して、受講生が到達目標を認識したうえで各授業回の講義を視聴し理解するのが、目標達成度を高めるうえで効果的と考えられる。

4.2.2 テキスト・シラバスへのリンク

表4a、4bの結果のように、ほとんどの受講生はテキスト・シラバスをきちんと参照、理解して科目を受講していた。同時に、表4eのように、グラフィック・シラバスの参照で、科目の体系を理解しやすくなる。近年は、紙ベースでなく、ウェブでアクセスしてテキスト・シラバスを参照できるシステムを導入する大学が多い。このウェブ上のテキスト・シラバスの1項目

として、15回分授業を記載の「授業計画」の次の位置にグラフィック・シラバスを設定してリンクさせるのが望ましい。学生は科目の体系性を理解しやすくなり、履修登録の有無や履修の必要性について、より深く考えられると期待できる。この場合、グラフィック・シラバスは、pdf など資料だけでなく、たとえば5分以内でガイダンス解説動画も含めてリンクがあると望ましい。学生は、シラバスの理解度を高められるだけでなく、担当教員の授業の雰囲気や人となりを把握できる。その結果、履修登録の有無の重要な判断手がかりとなり、ミスマッチを防ぎやすくなる。

4.2.3 カリキュラムマップ内の各科目へのリンク

科目 A は、社会調査士の資格取得に必要な計 8 科目のうちの一科目であった。4.1 節のとおり、科目 A のグラフィック・シラバスは科目 A の理解促進には有効であった。しかし、社会調査士に必要な知識・技能の体系の説明は科目 A のなかでは難しく、資格における科目 A の位置づけと、その他の計 7 科目の重要性の説明にとどまった。科目 A の授業中でなく、社会調査士を希望する学生グループへの説明の際に、図 1 a の社会調査士に必要な科目体系図内の各科目に、各科目のグラフィック・シラバスをリンクさせて説明が効果的であると考えられる。資格に必要な全 8 科目の学びの体系を把握しやすくなると期待できる。

表 2 のとおり、全学・学部・学科で定められたディプロマポリシーがあり、その保障のために設置されたカリキュラムがある。カリキュラム表の体系を把握しやすくするために、カリキュラムマップを学生に公開している大学も多い。カリキュラムマップは、カリキュラムをすでに理解している教員にとってはその体系の把握に有効であるが、カリキュラム内の各科目をこれから学ぶ学生には把握しにくいかもしれない。そこで、カリキュラムマップ内の各科目にグラフィック・シラバスをリンクさせて学生にウェブ公開すると、カリキュラムマップの理解度が促進されることが考えられる。全科目のグラフィック・シラバスの参照は分量的に多いため、たとえば必修科目やコア科目にマーカーをつけて、それらの科目のグラフィック・シラバスは参照するように学生指導でも、カリキュラムマップの理解促進につながると考えられる。

5. まとめ

本研究では、対面授業とオンデマンド授業の 2 科目で、各授業回の冒頭でグラフィック・シラバスを提示、説明し、その授業運営法や実践効果を検証した。両科目とも、履修登録前のテキスト・シラバスの参照率と理解度の評定値は高かった。グラフィック・シラバスの参照は、15 回授業全体の理解、次回授業の理解、科目の最終的な目標の理解、学習の動機づけに効果的である受講生の評定結果であった。対面授業とオンデマンド授業の 2 科目で、受講生の回答結果に大きな差はなかった。グラフィック・シラバスは、各授業回の冒頭と最後に毎回提示し、科目の到達目標も記載が有効と考察された。テキスト・シラバス、およびカリキュラムマップ内の各科目にグラフィック・シラバスのリンク貼り付けにより、シラバスの体系、およびカリキュラムの体系が把握しやすくなると提起した。

グラフィック・シラバスは、各授業回、科目、カリキュラムに関する学生の理解の促進だけでなく、科目とカリキュラムの体系化に向けた各教員の教育改善および FD につながる効果的なツールといえる。多様な授業形態や教員の実践研究報告が今後期待される。

参考文献

- (1) 川寄有紀: “グラフィック・シラバスでめざす授業改善 ②母性看護学”, 看護教育, Vol.56, No.12, pp.1164-1168 (2015)
- (2) 根岸千悠, 大山牧子, 浦田悠, 村上正行, 佐藤浩章: “シラバス作成に関するプレ FD の効果”, 日本教育工学会論文誌, Vol.45 (Suppl.), pp.205-208 (2021)
- (3) 佐藤浩章, 八重樫文, 志水良, 川寄有紀: “教育を「見える化」することで見えてくるもの”, 看護教育, Vol.56, No.12, pp.1148-1156 (2015)
- (4) 豊浦正広, 根岸千悠, 日永龍彦, 森澤正之, 塙雅典: “グラフィックシラバスの共創を通じた教員と学生の授業改善”, 日本教育工学会 2019 年秋季全国大会 2019
- (5) 大下茂: “人の心に近づく思考と技」を学ぶ—観光経営学を段階的に学ぶための授業改善—”, 高等教育開発センターフォーラム, Vol.1, pp.113-124 (2014)
- (6) 酒井浩二, 阿部一晴: “授業の到達目標の達成度評価と成績との関連性分析”, 教育システム情報学会, Vol.34, No.6, pp.229-234 (2020)